

一節 = 「芸術」

〔一・「華道(生け花)」〕

自然を生活に取り込んで楽しむ日本人の心が「華道(生け花)」の歴史と伝統を支えてきた。

温和な気候と変化に富んだ風土が草花の生育に適し、「春夏秋冬」それぞれに草花が咲き乱れ、美しい自然が形成されてきた。日本人は、恵まれた自然の中で生活し、花や草や木と深く関わってきた。そして、日本の自然の特徴である四季折々の美しさの変化が「華道」という伝統芸術を生んだ。

自然の中にある花や草木の美しさを再発見することが「華道」につながった。

古く万葉集、伊勢物語、枕草子にも、「華道」のことが記されている。

「華道」は、江戸時代(1603年～1867年)中頃以後、十流百家と呼ばれるほど、多くの流派が生まれ、広く普及した。

日本人は自然を愛し、草花を神や仏に供えた。

儀式のために飾り、自然との間で心を通わせることを目的に花瓶に挿し、鑑賞の対象としてきた。

自然の美しさを壊すのではなく、美しい草花を一層美しいものに作り上げて楽しんだ。

「華道」は、生活の中で「花を生ける芸術」として定着した。家庭で花を生けている人を含めると、「華道」人口は2千万人を越えている。



「華道」の振興を目的に組織された財団法人「日本いけばな芸術協会」には300を超える流派が加盟し、毎年、東京か大阪で「日本いけばな芸術展」が開かれている。

世界各国の人々にも愛され、国際的な広がりもある。流派に関係なく華道を愛好する外国人や日本人による一般社団法人「いけばなインターナショナル」がある。2015年時点で、54の国と地域に160の支部があり、会員は約8千人。5年に一回、日本国内で世界大会があり、2017年に「第十一回・世界大会」が沖縄県で開かれる。

## 【歴史・タイプ・芸術性】

「花を生ける」ことに約束事が成立したのは室町時代(1338年～1573年)。

「華道」を理論付けしたのは池坊専応だ。

「花を挿すことは昔からあったが、自然の美しさを身近に置いて楽しむことの大切さ」を力説した。

当時の「華道」は、何かの集まりや人を招いた時の正式な「立て花」と、日常生活の中で楽しむ自由な「投入れ」の二つのタイプがあった。

そして、室町時代から江戸時代に、花瓶に挿して形を整える「立花」と、茶席での「茶花」に変わった。

さらに、「立花」から「生花」と「投入れ」へ受け継がれた。

「華道」は、花を配する形が重要になる。

「立花」や「生花」の形は、成立した当時の日本人の自然観に基づいている。

形にこだわらない「投入れ」は、花を生ける人の個性で花の持つ美しさを表現する。

「華道」はさまざまな要素で構成されている。

例えば、花の色彩、明暗、大小、軽重、寒暖、清濁、さらに、葉、枝、茎などの違いにより、異なった美しさが表現される。

花器の形、材質、色合いなども作品に大きな影響を与える。

陶磁器、金属、木、竹など花器の材質と、それぞれの形や色によって、千変万化のバリエーションを楽しむ。

「華道」で最も大切なことは美を追求する気持ちだ。

美を求める精神と技術が結びついて初めて、生けた草花や木が芸術作品として完成する。

## 【理念と技法】

花を生ける時の基本的理念は、「天」、「地」、「人」だ。

「華道」が生まれた当時、人々は「宇宙は天と地と万物構成されている」と考えた。

宇宙は最初、混沌としていたが、やがて二分され、軽いものが上方に昇って「天」となり、重いものが下降して「地」となり、二つをつないで調和させているものを「万物」と考えた。「人」は「万物の霊長」として森羅万象の代表とされた。

三つの基本理念は、「華道」の造形として次のように表現されている。

「天」＝上段に高く伸び、主導的な役割を果たしている枝。

「地」＝下段に低い状態で補っている枝。

「人」＝この二つの間の中段で「天」と「地」の調和を保っている部分。

## ◇ 「天」、「地」、「人」の技法は次の通り。

仮に、「3本の花の茎、または小枝がある」とする。

- ① 一番長いものを「天」と呼び、花器のほぼ真ん中に生ける。
- ② 次に、中くらいの長さのものを「人」と呼び、花器の左右どちらかに生ける。
- ③ 一番短いものを「地」と呼び、花器の手前の方に据える。
- ④ 各々の枝の上方の突端を結ぶ線(見えない仮の線)が変則的な三角形を描くようにする。——素材を自由な三角形に作って、花を生ける人の個性を発揮する。

## ◎ 「華道」の種類 ◎

### ☆ 生花 (生け花・いけばな)

古典の「華道」の代表で、飾られる花の多くが「生花」だ。

花瓶などに飾るのが一般的で、「生け花」ともいう。

自然と人間の関係を「天、地、人」という世界観でとらえる。

### ☆ 立花

草花を花瓶に立てて、針金などで形を整える。

自然の景観を抽象的に表現する。床の間や書院・書斎などに飾る。

### ☆ 盛り花

明治時代(1868年～1912年)に、西欧文化の影響を受け、伝統的な「華道」を継承しながら新しい様式が生まれた。

テーブルの上に置いた水盤や籠などの花器に草花を盛る「盛り花」として発展した。生け方は自由だ。

### ☆ 投入

縦型の壺に生ける「生け花」の総称。

### ☆ 造形いけばな

現代の「華道」。伝統的な形を否定して、「花」を素材に、自然を対象とした新しい「生け花」。野外で木の枝を組み上げる大掛かりな作品も生まれた。

花を自由に組み合わせる「フラワー・アレンジメント」として好まれている。

## ◎ 流派 ◎

各流派が「自然と人間の調和」を主題に、独自の華道を追求している。

## ☆ 池坊<sup>いけのぼう</sup>

最も古い歴史を誇っている。

15世紀中頃の室町時代に「立花」の名手として知られた京都の僧侶・池坊専慶が始めた。池坊専慶が寛正3年(1462年)、武将の佐々木高秀に招かれた時、数十本の草花を金の花瓶に立てたことが始まり。

愛好家たちの間に「池坊立花」の名が広まった。

16世紀に入り、『池坊専応口伝』を著した池坊専応や『池坊専栄伝書』の池坊専栄が登場し、『いけばな』は、単に花の美を觀賞するものではなく、自然の姿を映し、宇宙の理を示すもの」と理論付けた。

その後、16世紀中頃の天文年間に生まれた池坊専好は、豪華な作風で、織田信長や豊臣秀吉など武家階級の支持を得て、16世紀後半には「池坊立花」は東北地方から九州まで広まった。

江戸中期の元禄年間には「池坊立花」は最盛期を迎えた。

その後は、他の流派が興り、「池坊」の地位はやや後退した。

しかし、長い歴史と伝統を持つ池坊は、最大の組織力を維持している。

## ☆ 未生流<sup>みしょうりゅう</sup>

江戸時代末期の大阪で、未生斎一甫によって創設され、「華道」の大衆化に大きな役割を果たした。

未生流の特色は「幽寂な象徴的作風」と言われている。

理論的には難解だが、実際に「花を生ける」技法は、どんな場合でも「直角三角形の中に枝をおさめる」という簡単明快なもの。

未生流は、関西を中心に多くの門弟を組織し、大きな流派の一つになった。

## ☆ 小原流<sup>おはら</sup>

明治時代の末頃、小原雲心によって創設された。

池坊の「立花」は重心が高く、不安定であると気づき、「重心が低い重量感のある華道」を主張し、自然主義を理念とする新しい流派を作った。

小原雲心は新しい花形による「盛り花」を創案し、当時、日本に入ってきた西洋の花も取り入れるなど、「生け花」に近代的な感覚を吹き込んだ。

## ☆ 草月流<sup>そうげつ</sup>

昭和5年(1930年)に勅使河原蒼風が創設した。

花器や素材を自由に駆使して取り合わせることを主張。

現代の生活に密着した「華道」を求め、鉄、針金、ガラス、石膏などを用いて独自の「生け花」を作り上げた。

## ◎ 花器と用具 ◎

### [花器]

どんな花器を使うかによって、花材も花形も決まる。

材質は、陶器、磁器、銅器、鉄器、銀器、自然木、漆器、竹など。

形は、「壺」と「水盤」(浅い器)の二つ。

### [用具]

・花盆 = 草花を載せる盆。

・水差 = 花器に水を注ぐ器。

・花如露 = 管の先に小さな穴がたくさんあり、草花に水をかける。

・花留 = 配置した花の根元を安定させるもの。

① 剣山(鉄の板に多数の金属の針が上向きに付いている。草花を針に刺して、固定させる)。

② 七宝繋ぎ(長楕円形の金属製の板をつなぎ合わせ、間に留め木を詰めて草花を束ねる)。

③ 仕切り留め木(花が倒れないように細かい棒を組み合わせる)。



## 【二・「茶道(茶の湯)」】

お茶は日本人に最も親しみ深い飲み物だ。抹茶を茶碗に入れてお湯を注ぎ、茶筌でかき回して泡を立てて飲むことを、芸術として確立したのが「茶道(茶の湯)」だ。

普段の生活の中から生まれた「茶道」は、600年近い歴史を有し、日本人の生活と心に深く根付いている。



### 【歴史と精神】

12世紀の終わりに、中国で禅宗を学んだ僧・栄西がお茶の種とともに、茶の道具や礼式を日本に持ち帰った。初めは貴重な薬だったが、その後、栽培に成功し、人々に広く飲まれるようになった。

お茶を飲み、道具を楽しむことを「茶道」として、精神的な高まりを与えたのが室町時代の村田珠光(1422年～1502年)だ。村田珠光が「茶と禅の精神の統一」を主張して、茶室で心の静けさを求める「侘び茶」を創り出した。「侘び茶」は、村田珠光から武野紹鷗を経て「千利休」(1522年～1591年)によって完成された。

16世紀末、「千利休」によって儀礼が定められ、心と形を伴った茶道として確立した。

「侘び茶」は、華やかな桃山文化の中であって、「簡素・閑寂」を精神としたものだった。

「茶道」は、豊臣秀吉や諸大名の保護を受けて流行し、さらに発展して、茶室、茶器、庭園などに優れた芸術作品を生み出した。

「茶道」は、人との出会いを大切にする。その精神を「一期一会」という。

また、「茶道」の心は、「閑寂な風趣」を意味する「侘(わび)」と「寂(さび)」で表されることが多い。

「わび」は、「静かに澄んで落ち着いた心」だ。「おごらず、つつましく」という生活態度。日本人の美意識は平安文学の「ものの哀れ」に始まり、「幽玄」になり、

「わび」に至る。

「さび」は、「枯れた趣」、「閑寂な心の動き」、「さっぱりとした中に深い味わいを感じさせる」という意味。俳諧の味わいを表現する言葉でもある。

「茶道」は「俗世界を離れ、かつ優美な趣」という風流な精神でもある。



「茶の湯とは ただ湯をわかし 茶をたてて 呑むばかりなる事とするべし」  
という「千利休」の和歌が「茶道」の真髓を示している。

「千利休」は、「織田信長」に仕え、「豊臣秀吉」には「天下一の茶人」としての待遇を受けた。しかし、「秀吉」の怒りに触れて切腹を命じられ、自害した。「秀吉」の怒りの原因については定説がない。「千利休」の孫である 千宗旦の子供 3 人が分かれて独自の「表千家」、「裏千家」、「武者小路千家」の流派を創設した。

この三つの流派が、千利休の系統を守っている。

中国から伝わった「お茶」は、日本で独自の発展を遂げ、日本の風土や日本人の心情に合った「茶道」に発展した。

「茶道」の形は変化したが、千利休没後 420 年以上が経過しても、「わび」「さび」の精神は受け継がれている。

## ※ 抹茶

茶の若葉を、「洗ってから蒸した後、乾燥して臼でひいて粉末にする」と、鮮やかな緑色の「抹茶」が出来上がる。

「蒸した」茶葉を乾燥しながら手で揉んだのが「緑茶」だ。緑茶には、香りが高く甘みのある最高級の玉露のほか、煎茶、番茶がある。

茶葉の製造過程の違いで、抹茶、緑茶・煎茶(発酵させない)、ウーロン茶(半発酵)、紅茶(発酵)となる。

## ※ お点前

「茶道」では、主人(亭主)がお客にお茶をご馳走することを「点てる」という。

茶室の畳の上で作法に従って茶を点てる一連の所作を「お点前」と呼ぶ。お点前を基調とする「茶道」の芸術性について、哲学者・谷川徹三は『茶の美学』の中で「身体の所作を媒介とする演出の芸術」と表現している。

野外で茶を点てることを「野点」という。

## ※ 茶室

茶会が行われる部屋のこと。お茶を味わいながら、主人とお客が心を通わせ、会話を楽しむ場所。

茶席では、政治と色恋の話は避けるのがルールだ。

茶室は庭に囲まれ、庭へ一歩踏み入れた時から、人は俗世界と離れて、身も心も清め、別の精神世界へ入る。茶室に至る「露地」を進むと「つくばい」という手水鉢(水を入れておく鉢)がある。客はそこで手を洗い、口をすすいで、「にじり口」(茶室独特の小さな出入り口)から茶室に入る。

茶室には、「床の間」と「床」を切り抜いた炉がある。茶室風の建物を「数寄屋造」という。

## ※ 取り合わせ

「茶道」では、吟味された茶の道具の「取り合わせ」の妙味が重視される。茶の道具の調和が重要だ。

## ※ 掛け物

茶室の「床の間」に飾る掛け軸を「掛け物」という。

中国や日本の禅僧の書や水墨画、有名な茶人たちの書や、和歌の書などが飾られる。

## ※ 花

「野に咲く花のように」というのが「茶道」の理想。

季節の花や、野草をそのまま「床の間」に生ける。

「わび」の精神に合致した花を生ける。

## ※ 水

「茶道」では、水を選ぶことも大事だ。

古来、茶人たちは、おいしいお茶を点てるために、谷川や井戸の名水を求めた。

## ※ 菓子

茶席では、季節に合った美しい色とりどりの和菓子が出される。

菓子を紙(懷紙)の上に取り分け、黒文字(黒文字の木から作った楊枝)で小さく切って食べる。

陶磁器や漆器などの器と、それに盛られた和菓子の調和は芸術作品だ。

## ※ 懷紙

「懷に入れておく紙」。菓子をのせたり、手を拭いたりする時に使う。

## ※ 懷石

濃茶を主眼とする茶事で、主人が客にすすめる食事を「懷石」という。

昔、座禅をした僧が空腹と寒さをしのぐために「石を温めて、懷の中に入れた」という故事による。質素なものが多い。



◎ 道具 ◎



- 茶碗<sup>ちやわん</sup>＝お茶を飲む<sup>の</sup>器<sup>うつわ</sup>。陶磁器<sup>とうじき</sup>が多い。  
色<sup>いろ</sup>や形<sup>かたち</sup>など、茶碗の出来具合<sup>できぐあい</sup>を鑑賞<sup>かんしょう</sup>する。
- 釜<sup>かま</sup>＝お茶を点<sup>た</sup>てるために、湯<sup>ゆ</sup>を沸<sup>わ</sup>かす金属製<sup>きんぞくせい</sup>の器<sup>うつわ</sup>。
- 柄杓<sup>ひしゃく</sup>＝釜<sup>かま</sup>の湯<sup>ゆ</sup>を茶碗<sup>ちやわん</sup>に注<sup>そそ</sup>ぐための竹製<sup>たけせい</sup>の道具。
- 茶筌<sup>ちやせん</sup>＝茶碗に入れた抹茶<sup>まっちゃ</sup>と湯<sup>ゆ</sup>をかき回<sup>まわ</sup>して泡<sup>あわ</sup>をたてる竹製の道具。
- 風炉<sup>ふうろ</sup>＝湯<sup>ゆ</sup>を沸<sup>わ</sup>かすのに使う鉄<sup>てつ</sup>や銅<sup>どう</sup>で作<sup>つく</sup>った炉。
- 茶入れ<sup>ちやいれ</sup>＝抹茶<sup>まっちゃ</sup>を入れておく容器<sup>ようき</sup>。「棗<sup>なつめ</sup>」ともいう。漆塗り<sup>うるしぬ</sup>が多い。
- 茶杓<sup>ちやしやく</sup>＝茶入れから抹茶<sup>まっちゃ</sup>をすくって、茶碗<sup>ちやわん</sup>に入れるもの。主<sup>おも</sup>に竹製<sup>たけせい</sup>。
- 茶巾<sup>ちやきん</sup>＝茶碗を拭<sup>ふ</sup>く布<sup>ぬの</sup>。



## 二節 = 「芸能」

### [一・「歌舞伎」]

400年以上の歴史を持つ「歌舞伎」は、日本が世界に誇る伝統芸能だ。

常に技を磨き、ユニークな発想や演出を生み出し、庶民とともに生きてきた。

2007年12月、十二代目・市川団十郎がフランス・パリのオペラ座で初めて「歌舞伎」を上演した。2008年11月には、ユネスコ(国連社会科学文化機関)の「無形文化遺産」に選ばれた。

近年、三代目・市川猿之助や七代目・尾上菊五郎らが、「スーパー歌舞伎」という「宙乗り(劇場の天井から吊り下げられて、客席の上を移動しながら演技する)」をしたり、水や火を使ったり、「世界の歌姫」と言われるレディー・ガガの衣装を真似るなど、新しい試みが登場している。



#### 歴史

「歌舞伎」の創始者は、現在の島根県出雲地方の「お国(阿国)」という女性。

出雲大社の巫女(神に仕えて祈祷などを行う女性)だった「お国」は、慶長年間(1596年～1615年)に、出雲大社の修復のための勧進と呼ばれる寄付興行で、女性中心の歌舞団を組織した。

その後、京都の四条河原の興行が評判になったのが「歌舞伎」の始まり。

「お国」の歌舞団の芸は、派手な衣装を着けた踊りや、能・狂言を分かりやすくした滑稽な物真似芸など、民衆の好みに応えたものだった。

長い戦乱の時期を脱して平和がもたらされ、民衆は娯楽を欲していた。

普通の人と異なった奇異な格好をし、女が男に扮したり、きらびやかな服装で人目を引いて人気を集めた。

「歌舞伎」は初め、女性だけで演じられていたが、「風紀を乱す」などの理由で禁止され、間もなく男性だけが演じるようになり、江戸文化の華として完成した。

「歌舞伎」の名前は、「常軌を逸する。自由奔放に振る舞う。奇異な」という意味の「傾く」から。「一風変わった奇異な芸」を「傾いた芸」として、「かぶき」と呼んだ。最初は「歌舞妓」の字を当てたが、明治時代に「妓」が「伎」に置き換えられ「歌舞伎」となった。

「物珍らしい一風変わった芸能」だった「歌舞伎」は、18世紀初頭の元禄時代に演劇としての要素を高めた。

「歌舞伎」の名作には「仮名手本忠臣蔵」、「勧進帳」、「暫」、「菅原伝授手習鑑」、「義経千本桜」、「東海道四谷怪談」などがある。

## 【「歌」、「舞」、「伎」の文字】

〈歌〉は音楽的要素。長唄、義太夫などの三味線音楽がバックミュージックとして、演技を助ける。雨や風や、音のない雪も大太鼓で表現する。

〈舞〉は舞踊の舞で、「舞」のこと。仕草や立ち回り（争うシーン）も舞踊が基本。『娘道成寺』、『鏡獅子』などは、舞踊そのもの。

〈伎〉は演技すること。演技の「技（わざ）」と同じ。

「歌舞伎」の演目は、主に江戸時代以前の武士が出てくる「時代物」、町人や庶民が主役の「世話物」、「舞踊」に分けられる。

また、豪快な芸で勇壮な人物を演じる力強い内容の「荒事」と、柔らかな芸で男女の恋愛などを演じる「和事」がある。どちらも、親子の情、男女の愛、主従の忠義、出会いも別れもある人間の心、つまり喜怒哀楽がテーマだ。

「歌舞伎」の海外公演では、心理描写の巧みな演技が共感を生んでいる。

上流階級の御殿のような豪華絢爛な舞台があれば、庶民生活をリアルに描いた舞台もある。醜く、残酷な場面でも、美化して表現する。どんな時も「歌舞伎」は美意識を忘れない。

## ◎「歌舞伎」の言葉◎

### ◇ 定式幕

世界の舞台芸術の多くは上下に開閉する緞帳を使うが、「歌舞伎」は主に左右に開閉する引幕を使う。

黒、柿色（茶色）、萌葱色（グリーン）の三色の縦縞の引幕を「定式幕」という。芝居の幕開き、幕切れに用いる。

### ◇ 女形（おやま）

「歌舞伎」では、子役以外はすべて男性が演じる。女性の役を演じる男性を「女形」または「おやま」という。

女形の存在は、中国の京劇にも見られるが、「歌舞伎」の最大の特徴だ。主な男性の役を「立役」という。

◇ 柵

「歌舞伎」の舞台は、「柵」と呼ぶ二本の檣の木(拍子木)を打ち合わせる音で進められる。「チョンチョン」という高い音がする。

◇ 廻り舞台

舞台を丸く切り抜いて、床下から操作して、独楽のように回転させる装置。「廻り舞台」は、18世紀の中頃に、世界で最初に「歌舞伎」で使われた。

◇ せり(迫)

舞台の床の一部を切り抜いて穴を開けた構造を「せり」という。登場人物や舞台装置を「せり上げたり、下げたり」する。

舞台の床下を「奈落」という。「地獄、物事のどん底」を意味する言葉としても使われる。

◇ 隈取

「歌舞伎」の特殊メイク。

顔に紅、藍、墨で筋を描いて、「役」の性格を誇張する化粧方法だ。役者の顔の骨格に沿って線を引き、指でぼかしながら、勢いのある表情に仕上げる。

◇ 花道

「歌舞伎」特有の舞台構造に「花道」がある。

客席の中を、舞台に直角に伸びる細い通路。舞台の延長でもあり、舞台とは別の時間、空間の場にもなる。「花道」の出入り口には、劇場の紋を染め抜いた「揚幕」があり、「チャリン」という音に合わせて登場人物が出入する。手を振り、高く足踏みし誇張しながら歩く「六方」という芸は力強さと荒々しさを印象付ける。主に、「荒事」の役が「花道」を引込む時に演じる。

「花道」という言葉は「歌舞伎」以外でも使われる。「人が華々しい状態で辞める」ことを「引退の花道を飾る」といい、大相撲の力士が「土俵」に向う道、帰る道も「花道」という。

◇ 見得

舞台の雰囲気や登場人物の心情が高まった時や、役者の演技を誇張したい時に格好のいい形に決めて静止する演技を「見得」という。

クローズアップの手法。ストップ・モーション。「自分の力を誇示するような態度をとる」ことを「見得を切る」、「外見を飾ったり、他人を意識して実際以上によく見せようとする」ことを「見得(見栄)を張る」という。

## ◇ 黒衣

「歌舞伎」では、「黒は見えないもの」という約束事がある。小道具などの受け渡し、衣装の肌脱ぎなど、役者の介添えをする。舞台の上で使わなくなった道具を片付ける時に舞台に出てくる。雪の場面は白い衣装の「雪衣」が出てくる。背景の黒い幕は夜の闇を表す。

「彼は、いつも黒衣（黒子）に徹して、決して表に出ない」など、一般にも使われる。

## [二・「能」と「狂言」]

「能」と「狂言」の歴史は「歌舞伎」より古い。

室町時代(14世紀～15世紀)に完成した。奈良時代に中国大陸から伝来した散楽(民間の舞楽)が平安時代に猿楽となり、その猿楽や庶民芸能である田楽などの系統の中で発展してきた。

「能」と「狂言」は、兄弟の関係にあり、明治時代にそれぞれが独立した。

「能」は、猿楽や田楽の歌舞、演劇の部分を取り入れ、文芸的なものを題材とする音楽・歌舞劇だ。「狂言」は、猿楽や田楽の「物真似」などの部分を受け継いで、滑稽な対話劇となった。「能」が面を使うのに対し、現実の世界を描くことが多い「狂言」は面を使用することは少ない。

「能」と「狂言」が一緒に演じられる場合もある。

「能」を「能楽」と呼ぶこともあり、「能」と「狂言」を総称して「能楽」ともいう。

「能楽」は「歌舞伎」とともに、2008年11月、ユネスコの世界無形文化遺産に選ばれた。

## 能



「能」は、男性の役者によって演じられてきたが、近年では女性も演じる。

夕闇が深まる野外で薪を焚いた照明の中で演じられる「薪能」が人気だ。

「能」は、神や人の霊が出てくる話が多いため「面」を使うのが他の演劇との大きな違い



だ。「面」は端麗だが、無表情のものがほとんど。人の表情を「能面のような顔」という場合は、「無表情で冷たい顔」という意味になる。

「能」は、舞台全体に美しさを表現して、観客に感動を与える。そのため、人の喜びや哀しみを露骨に出さずに、極端な喜怒哀楽の演技を避ける。

一般に、男性の役者が、女性や老人、少年、鬼神や動物の精など人間でないもの、人間であっても現実の世の人でない役を、「面」をつけて演じる。

「面」を「上に向ける」と「喜び」の表情になり、「下に向ける」と「哀しみ」を表す。足の動作は「摺り足」と呼ばれる独特の歩き方で、足の裏で地面を滑るように歩く。

「能」の役者は、主に「シテ」方、「ワキ」方、「囃子」方、「狂言」方の四種類の演技を分担する。シテは「主人公の役」であり、「能」の中心的な存在。ワキはシテの相手役。

シテ、ワキに伴って助演する人を「ツレ」という。

「囃子」は笛、小鼓などの楽器を演奏する。

「能楽」の歌を「謡」という。夫婦の愛と長寿を意味する「高砂」は、結婚式で歌われる。「能」舞台の端にいる人たちが歌う謡を「地謡」と呼ぶ。コーラスだ。

## 歴史

「能」は中世という戦乱の時代に生きた武士に育てられた。人間本来の生き方としての静寂を求めた。農村の祭で演じられていた猿楽が、鎌倉時代から南北朝時代にかけて歌舞や音楽を取り入れて、宗教的な意味合いを持つ能(能楽)に発展した。

室町時代に将軍・足利義満が能役者・能作者の「観阿弥、世阿弥」父子をバックアップし、芸術性の高い能が完成した。世阿弥は、数多くの謡曲(能の台本)などを書き、「能」の真髄を理論書「風姿花伝」(通称「花伝書」)にまとめた。

「能」には、観世流、宝生流、金春流、金剛流、喜多流の五流派がある。

現在、上演される曲目は約240曲。江戸時代に確立された「能」は五番編成だ。シテの役柄で分類すると、初番目物から五番目物まで5種類ある。

「神、男、女、狂、鬼」の分類法や、夢幻の世界を描いた「夢幻能」と、現実を描いた「現在能」に分ける分類もある。代表的な「羽衣」は「天女が盗まれた羽衣を漁師が見つけて返してもらったお礼に舞を舞って天に昇っていく」話だ。

## ◎「構成」・「面」と「舞」◎

「能」は舞台装置を作らない。家や舟などの「作り物」と呼ぶ小道具を使うだけ。

実際の情景を作らずに、観客が舞台に自由に幻想を描いてもらう手法だ。

「能」には一場面の「一場物」と、前後二段からなる「二場物」があり、ほとんどが「二場物」だ。

「二場物」では、前段と後段で「シテ」が代わり、前段のシテを前ジテ、後段のシテを後ジテと呼ぶ。例えば、「竜田」という曲では、前ジテが神社の巫女として登場する。『竜田姫を神として祭る竜田神社に参詣するために竜田川を渡ろうとする旅の僧(ワキ)を引きとどめて、別の道から神社に案内する。そして、境内の紅葉が神木であることを教えて、



自分が竜田姫だと名乗って社殿の中に姿を消す。やがて夜になると、後ジテが僧の前に竜田明神の姿で現れ、神社の成り立ちの物語を語り、神楽の舞を見せ天に昇っていく。』

「能」は「仮面劇」と呼ばれる。様々な「面」が面白さの大きな要素だ。  
翁系、老人、鬼神、女性(若い女性、中年の女性、老女)、怨霊、男性(少年、公達、武将)などの「面」による「舞」が披露される。大振りで華麗な装束も、観客を楽しませる。



## きょうげん 狂言

「狂言」は猿楽の系統の中で、「能」との組み合わせで発展し、「せりふ」劇として独立した。

中世の庶民の間に、滑稽な物真似芸である「狂言」が、風刺性の強い喜劇として、笑いを撒き散らした。「狂言」では、観客の間で哄笑(大口をあけて笑うこと)が起こる。冗談や洒落などの対話が笑いを誘うのだ。

「狂言」の主役は「能」と同じ「シテ」。相手役は「アド」と呼び、シテと同じように活躍する。

「狂言」の「しぐさ」は、「能」の場合と同じように、やや腰を落とし体の重心を下げ、「すり足」で歩く。

「狂言」の「せりふ」は、民衆の生活などに題材を求め、中世の口語で生き生きとした対話形式で書かれている。主に上方(京都、大阪)の日常会話がが多い。

「狂言」では、「扇」を「杯」として使ったり、戸を開ける時の動作では「ガラガラ」、障子を破る時の動作では「バリバリ」と口で音を出したりする。「能」と同じように戸や障子などの舞台装置はない。開けたり閉めたりする動作の時に擬音を発する。

「面」をつけない素顔(直面)が普通だが、人間(祖父、尼など)、神仏・鬼畜(えびす、大黒、福の神など)などの「面」がある。

装束は、絢爛豪華な「能」と比べると地味だ。

「狂言」は、約260曲ある。

それらの演目は、主要人物によって神物、大名物、小名物、婿物、女物、山伏物、鬼物、出家物、座頭物、百姓物、集狂言に分類される。

登場人物では、「太郎冠者」が親しまれている。

「大蔵」、「和泉」、「鷺」の三流派がある。

「狂言」という言葉は、普通の生活で、

①人をだますために仕組んだこと、うそ(「狂言強盗」)

②戯れに使う言葉、冗談

などの意味に使われる。

# 三節＝「スポーツ」

## [一・「相撲」]

「相撲」は、「土俵」と呼ばれる円形に固められた「土」の上で、2人が東と西に分かれ、体と体をぶつけ合って戦うスポーツ。素手で、腰に「まわし」と呼ばれる絹の細い布を締めるだけ。相手を土俵の外に出すか、相手の足の裏以外の体の一部(手足はもちろん髪の毛まで)を先に土俵の土に付けた方が勝ちになる。

### ※ 国技

「相撲」は日本の国技だ。

プロの大相撲は日本独自の文化として発展した。

「礼に始まって、礼に終わる」と言われ、「礼節を重んじる」ことが最も重視される。上位の人を敬い、相手を尊重する。肉体的な強さだけでなく、精神的に充実した態度が求められ、その精神が日本人の国民性に合致する。

試合前の「仕切り」と、終わった後の「お辞儀」が大事な動作だ。

「相撲」を取る人を「力士」と呼ぶ。体重の重い人も軽い人も同じ土俵で戦う。

小柄な人が鮮やかな技で大きな人を負かすのが相撲の醍醐味の一つ。

### ※ 歴史

神話時代に神様同士が力比べをして、「国譲り」という大きな問題を解決したという伝説が「相撲」の始まり。

そして、隣村同士の力自慢が戦い、その結果で豊作か凶作かを占う儀礼が行われたのが「相撲」の原型になっている。豊作になった時には、感謝の気持ちを込めて、改めて神前で「相撲」が奉納された。

7世紀には、天武天皇の前で「相撲」の技を競う天覧相撲が行われ、「相撲」が国民の間で広まった。

昔の「相撲」は、突き合ったり、蹴り合ったりするもので、時には生死を賭けて戦った。16世紀の戦国・安土時代の武将・織田信長(1534年～1582年)は「相撲」好きで知られ、土俵を考案したとされる。

江戸時代(1603年～1868年)に入り、京都や大阪で盛んだった「相撲」の中心が江戸(現在の東京)に移った。江戸中期の元禄時代(1688年～1704年)に、お寺や神社の建りゅうなどのために寄付を募る「勧進相撲」が行われた。

江戸後期に、横綱「谷風」や大関「雷電」などのスター力士が誕生し、「相撲」人気は高まった。

## 《大相撲》

プロの相撲を「大相撲」という。

日本相撲協会主催の「大相撲」が一年に6回、奇数月に行われる。

1月は初場所(東京)、3月は春場所(大阪)、5月は夏場所(東京)、7月は名古屋場所(名古屋)

古屋)、9月は秋場所(東京)、11月は九州場所(福岡)だ。

一回の場所は、15日間。最初の日を初日、最終日を千秋楽という。



2010年の3月場所と5月場所の「大相撲」の取り組みで、不正行為である「八百長」が行われたことが、2011年2月に発覚した。「大相撲」に対する国民の批判と不信が強まり、同年3月の春場所(大阪場所)が中止された。(八百長とは、「わざと負けるように仕組んだり」、「勝敗をお金で売買したり」すること)。

「土俵」は、直径4メートル55センチの円形に固めた土で作られている。その周囲を、藁で編んだ袋に土と小石を詰めた俵で囲んだもの。

力士の地位は「番付」という。

下から序の口、序二段、三段目、幕下、十両、幕内と上がっていく。

「幕内」は、役力士(最高位の「横綱」をトップに大関、関脇、小結)と、それ以外の平幕(前頭)をいう。十両以上の力士を「関取」という。

「関取」は、髪は銀杏の葉に似た「まげ」(大銀杏)を結う。

「横綱」の名前は、腰に長さ約4メートル、重さ約15キログラムの白い綱(しめ縄)を巻きつけることから付いた。

「十両」と「幕内」の力士が、取り組み前に行うのが「土俵入り」。

「横綱」の「土俵入り」を特別に「手数入り」という。「太刀持ち」と「露払い」の二人の力士が「横綱」の介添えをする。

力士は、本名とは別に四股名を持っている。第4代の谷風、栃錦、大鵬、北の湖、千代の富士、貴乃花、白鵬、鶴竜(いずれも横綱)など。

大相撲で優勝回数が最も多いのは、白鵬(モンゴル)の37回、次いで、大鵬の32回。千代の富士の31回、朝青龍(モンゴル)の25回、北の湖の24回。

最も重かった力士は、285キログラムの元大関・小錦(ハワイ)だ

## ※ 大相撲の国際化

1993年3月場所で、アメリカ・ハワイ出身の「曙」が外国人力士として初めて第64代の横綱になった。

外国出身の力士が急増して、大相撲の国際化が進んだ。

曙と同じハワイ出身の武蔵丸が第67代横綱になった後、第68代・朝青龍、第69代・白鵬、第70代・日馬富士、第71代・鶴竜のいずれもモンゴル出身者が横綱になった。

2016年7月時点で、力士の総数は660人(番付別の内訳＝幕内・42人、十両・28人、幕下・120人、三段目・200人、序二段・208人、序の口・62人)。

このうち外国人力士は12カ国の38人。モンゴル出身が24人で圧倒的に多く、次いで、ジョージア、中国、ロシアが各2人、ブルガリア、ブラジル、エジプト、韓国、米国、ハンガリー、カナダ、フィリピンの各1人。

42人いる幕内力士では、13人が外国人で、横綱・白鵬を始め8人がモンゴル出身。ほかにブルガリア、ブラジル、ジョージア、エジプト、中国の各1人。

なお、横綱・貴乃花が2003年(平成15年)1月場所中に引退して以来、「日本人横綱」は不在となっている。

## 【取り組み】

### ◎「土俵」に上がって「塩を撒く」

東西に分かれた2人の力士は、「呼び出し」に「しこ名(名前)」を呼ばれてから、「土俵」に上がる。

取り組みの前に四股を踏む。左右の足を交互に高く上げ下げする準備運動だ。

「取り組み」が始まるまでに3～4回、「土俵」の隅にある「ざる」に入った塩を「土俵」に撒く。塩を口に含んだり、高く撒いたりする。塩を撒くのは、「土俵」の上の邪気を払う、などのため。

### ◎「仕切り」と「立ち合い」

2人の力士は、行司の指図に従って、試合の準備として土俵の上で向かい合って相対し、両手を「土俵」につける。これを「仕切り」という。

「土俵」の中心から35センチ、つまり70センチの間隔の所に、幅10センチ、長さ80センチの白い「仕切り」線がある。

行司は団扇のような「軍配」で、力士を立ち合わせ、取り組みの後、勝った力士の「しこ名」を呼ぶ。

### ◎ 勝敗の「決まり手」

勝負が決まる技を「決まり手」という。

以前は四十八手だったが、技が複雑になり、現在は八十二手。

自分の体を相手に密着させて前進して相手を土俵の外に出す「寄り切り」が最も多い。このほか、押し出し、下手投げ、上手投げ、寄り倒し、突き出し、はたき込み、ほかに、土俵際で逆転する「うっちゃり」など。

## ◎【大相撲の言葉】◎

### ◇ 行司

勝敗の判定役のこと。最高位は「立行司」。「行司」は、烏帽子(烏の羽のように黒い帽子)をかぶる。「立行司」と三役格の行司は白足袋と草履、「幕内」格と「十両」格の行司は白足袋、「幕下」格以下の行司は素足。

「行司」や、力士の名を呼ぶ「呼び出し」、力士の髪を結う「床山」などが大相撲文化を支えている。

### ◇ 金星

「平幕」の力士が「横綱」に勝つことを「金星」という。

「星」は勝敗を意味し、勝てば「白星(勝ち星)」、負ければ「黒星」。一場所の半分・8日以上勝つと、「勝ち越し・星を残す」という。

### ◇ 結びの一番

その日の最後の取り組み、をいう。

15日目の最後の取り組みは「千秋楽の結びの一番」。

### ◇ 物言い

「行司」の判定に対して、「土俵」の下にいる審判員が疑問や異議を言うこと。  
5人の審判員が協議して結論を出す。

### ◇ 水入り

勝負が長引いて2人の力士が疲れていると行司が判断して、「取り組み」を一時中断させること。

### ◇ 取り直し

「取り組み」をやり直すこと。

①2人の力士が同時に「土俵」に倒れたり、「土俵」の外に出たり、などの「同体」の時、②二度、「水入り」があつて勝負がつかない時、それぞれもう一度、取り直す。

### ◇ 「ごっつあん」

「ごちそうさま」が訛った言葉。ありがとう、の意味。

### ◇ ちゃんこ

「力士」が作って自分たちで食べる料理。魚や肉、野菜などを入れた鍋料理。



◇ タニマチ(たにまち)

明治の終わり頃、大阪の谷町に住んでいた相撲好きの歯医者<sup>はいしや</sup>が、力士からは治療費<sup>ちりょうひ</sup>を取<sup>と</sup>らなかったことから、後援者<sup>こうえんしや</sup>を「タニマチ」と呼ぶ。

◇ 徳俵

「土俵」は、東西南北に俵一つ分だけ外側にずらしてある。  
昔<sup>むかし</sup>の野天相撲<sup>のてん</sup>で、「土俵」の雨水<sup>あまみず</sup>の排出口<sup>はいしゅつこう</sup>として作<sup>つく</sup>られた。  
相手に攻<sup>あいて</sup>めらた力士<sup>せ</sup>が得<sup>とく</sup>をすることから、「とくだわら」と呼ぶ。

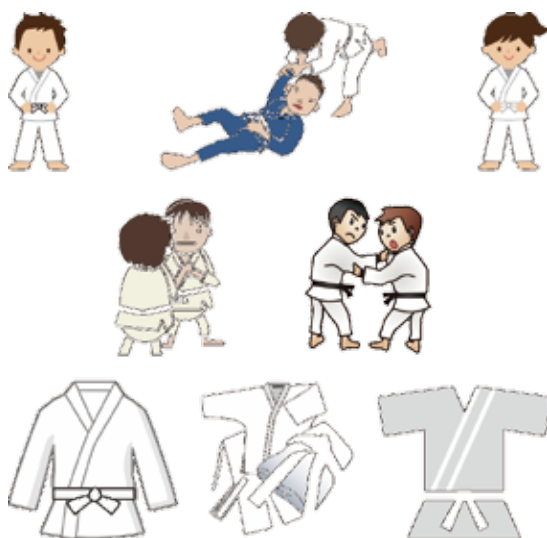
◇ 朝稽古

力士<sup>いちにち</sup>の一日は、朝5時頃<sup>あさ じ ごろ</sup>からの朝稽古<sup>あさげい こ</sup>で始まる。  
午前11時頃<sup>ごぜん じゅうじ</sup>に食<sup>しょく</sup>事<sup>じ</sup>をしてから昼寝<sup>ひるね</sup>をする。体<sup>からだ</sup>を大きくして太<sup>ふと</sup>るために、力士<sup>ひるね</sup>に昼寝<sup>か</sup>は欠かせない。

=====

[二・「柔道」]

「柔道」は、相手と柔道衣<sup>じゅうどうぎ</sup>を取り合<sup>あ</sup>って、投げたり、抑え込んだりして勝敗<sup>しょうはい</sup>を決<sup>けつ</sup>める日本の国技<sup>こくぎ</sup>。日本では、「講道館柔道<sup>こうどうかんじゅうどう</sup>」が正式名称<sup>せいしきめいしやう</sup>だが、一般<sup>いっぱん</sup>に「柔道」と呼ぶ。



全日本柔道連盟<sup>ぜんにっぽんじゅうどうれんめい</sup>(全柔連)が1949年(昭和24年)に結成<sup>けつせい</sup>され、3年後<sup>ご</sup>の1952年に国際柔道連盟<sup>こくさいじゅうどうれんめい</sup>(IJF)が組織<sup>そしき</sup>された。

1964年(昭和39年)の東京オリンピックの正式種目<sup>せいしきしゅもく</sup>に採用<sup>さいよう</sup>された。

2011年現在<sup>げんざい</sup>、200の国・地域<sup>くに・ちいき</sup>がIJFに加盟<sup>かめい</sup>し、「JUDO」は世界的なスポーツ<sup>せかいてき</sup>に成長<sup>せいちやう</sup>した。



した。

1882年(明治15年)に、嘉納治五郎が東京・文京区に道場を開いて講道館を創立したのが柔道の始まり。「体が小さく、大きな者にいじめられたので強くなりたいと思った」嘉納治五郎は、いろいろな柔術の優れたところを集め、危険なところを除く工夫と研究を加え、新しい「柔道」を創始した。

「柔道」の精神を「精・力・善・用・自・他・共・栄」と表現した。攻撃と防御によって、「身体を鍛錬して強健にし、精神の修養にも努めて人格の完成を図り、社会に貢献する」のが目的。

「柔能く剛を制す」が「柔道」の神髄を表現する言葉だ。「柔和な技の持ち主が力の強い者に勝つ」という意味。「柔道」を「やわら(柔ら)」とも呼ぶ。

「柔道」では、「内に礼を」の精神を深め、「外に礼法を正しく守る」ことが要求される。「礼」は、相手の人格を尊重し、敬意を表すこと。「礼に始まり、礼に終わる」精神が大切で、試合や練習の前後に互いに礼(あいさつ)をする。

「柔道」については、『「柔道」の基本は「受身」。「受身」とは、「ころぶ」練習、「負ける」練習』、「人の前で恥をさらす」練習』と言われる。

「黒帯」が柔道のシンボル。初段以上の有段者が締める帯をいう。柔道を始める人たちの最初の目標だ。外国でも「クロオビ」という。

## ◇ 柔道衣

上衣(上着)と下穿(ズボン)と帯(ベルト)を総称して「柔道衣」という。

上衣と下穿は伝統的に「白」を使用。しかし、試合の時、審判や観客が選手を見分けるのが難しいため、国際柔道連盟は1997年(平成9年)10月、試合では、「一方が白色、もう一方が青色」と決めた。

「柔道」が日本の武道であり、白い柔道衣が柔道の象徴だった。このため、日本では「カラー柔道衣」への抵抗感が少なくなかった。しかし、柔道の世界的な発展にプラス、と判断し、日本も受け入れた。

日本国内の大会では、「白い柔道衣」だけが使われている。

## ◇ 体重別

以前は、体重に関係なく「無差別」で行われたが、1964年の第18回・東京オリンピックから「体重別」に変わった。

東京オリンピックの時は、無差別級、重量級(80 kg超)、中量級(80 kg以下)、軽量級(68 kg以下)の四階級の体重別だった。

その後、体重別がさらに細くなった。

現在、男子は「60 kg以下、66 kg以下、73 kg以下、81 kg以下、90 kg以下、100 kg以下、100 kg超、無差別級」、女子は「48 kg以下、52 kg以下、57 kg以下、63 kg以下、70 kg以下、78 kg以下、78 kg超、無差別級」、とそれぞれ八階級に分かれている。

世界柔道選手権大会や日本で最も格式の高い全日本柔道選手権大会では無差別級もあるが、オリンピックは無差別級を除く七階級で行われる。

#### ◇ 技と判定

「技」には、「投げ技」と「固め技」がある。

「投げ技」は、体落とし、背負い投げ、大外刈り、大内刈り、など。

「固め技」は、袈裟固め、肩固め、十字締め、腕がらみ、十字固め、など。

試合の判定は、相手の背が畳につくなど、「技」がはっきり決まると「一本」で「勝ち」となる。

一本が決まらない場合は、「技あり」、「有効」、「効果」の回数により「優勢勝ち」を決める。

### [三・「剣道」]

防具を着けて、「竹刀」と呼ばれる独特の道具で戦うのが「剣道」だ。

古来の武術が発展した。「剣は人なり」という言葉がある。

「剣道」では剣の技術を習得するとともに、心を磨く。その人の心の修養や人間形成の面が大切にされる。

試合の始まりと終わりに、必ず互いに「礼」の挨拶をし、相手に敬意と感謝の気持ちを示す。勝った者がガッツポーズをしたりすると、勝ちが取り消される。

戦後、GHQ(連合軍総司令部)の占領政策が続いた約7年間は、剣道は戦前の武士道の象徴と見なされ、学校や道場で全面禁止されていた。

だが、愛好者たちは増え続けた。現在では「剣道」を教育の一環として取り入れている学校も多く、各地に剣道の道場がある。

初段以上の有段者はすでに165万人(女性が47万人)を超えた。

1970年に国際剣道連盟(FIK)が設立され、3年ごとに世界剣道選手権大会が開催されている。2015年5月に東京で行われた第16回世界剣道選手権大会には、56カ国・地域から600人が参加した。

FIKには、2015年現在、57の国・地域が加盟している。



## 〔四・「空手」〕

素手で戦う「空手」もほかの武道と同じく、高い精神性を持ち、礼節や長幼の序などの厳しい規範がある。勝つことを究極の目的とするのではなく、厳しい練磨の中から有形無形の試練を乗り越えて、自己完成を図ることを目指している。

「空手」は、突き、打ち、蹴り、受け、を基本とした武術だ。

身体のをすべてを武器として鍛え、どんな体勢からも、どんな方向からも、変化に応じて手足を自由に使って、相手の攻撃に対処する。人間に備わっている総合能力の勝負でもある。

自己の能力の開拓が「空手道」の修練の目的だ。

「空手」では、初段以上が「黒帯」。それ以下は、茶色や緑色などの帯を使う。



### 歴史

「空手」は沖縄県の護身術から発展した。

沖縄には、古くから「手」と呼ばれる護身術があり、中国武術の影響を受け、「唐手」とも呼ばれた。民衆は村や家族を守り、自らの護身のために「唐手」を修練した。素手で武器にも対抗できる一撃必殺の武術として完成した。

「唐手」を初めて世の中に公表したのが沖縄の教育者だった船越義珍(1870年～1957年)だ。1922年(大正11年)春、船越が上京して「唐手」を公開すると、その威力が人々を驚嘆させた。その後、沖縄から宮城長順などの名手が上京し、全国に普及した。

1935年(昭和10年)、船越義珍は自らが傾倒していた禅の教えから「唐手」の名前を「空手」に改めた。

1956年(昭和31年)に競技としてのルールが出来上がった。

1957年(昭和32年)には、第一回・全日本大学空手道選手権大会が開催され、1981年(昭和56年)に「空手」は国民体育大会(国体)の正式種目となった。

1993年に世界空手道連盟(WKF)が組織され、2011年現在、183の国・地域が加盟している。多くの国々に空手道場がある。

1970年(昭和45年)に東京・日本武道館で第一回が開かれた世界空手道選手権大会は、二年に一回、各国で開催されている。

「空手」は2016年8月、2020年に開催される東京オリンピックの競技に決定した。